

一致の原理と区別のための諸状態

——アバエラルドゥスの status と実在論者の status ——

永 嶋 哲 也

はじめに—— status 以前の実在論

アバエラルドゥス (Petrus Abaelardus, アベラール Peter Abaelard) がついにパリへとたどりついた 1100 年頃、論理学の分野でシャンポーのグィレルムス (Guillelmus Campellensis, ギョーム William of Champeaux) が第一人者とみなされていた(災厄の記¹⁾ 13 頁)。グィレルムスは、当時台頭してきたことばに即して論理学を取り扱う学派に抗して、事物に即して論理学を扱おうとし、普遍を個に内在する存在者 *essentia*²⁾ だと考えた (災厄の記 15 頁)。つまり質料的な類に種差が形相として付加されることによって種となり、さらに種に付帯的な形相が付加されることで個となる。逆に言えば、各個人から個々の付帯性・形相を取り除くと種“人”という存在者 *essentia* を取り出すことができ、それはすべての個人において同一なのである、と。通例、このような立場は、質料的な存在者 *essentia* の同一性を主張する実在論³⁾ であるので「“同一存在” 実在論 *material essence realism*」と整理される。

しかしこのような素朴な立場はアバエラルドゥスによって完膚なきまで論難され(つまり彼は「同じ一つの事物が互いに矛盾する形相を同時に受け入れているということになるが、どうしてそのようなことが認められよう」と言う)、グィレルムスは彼の主張点であった同一性を「違いがない *indifferens*」というところまで後退させざるを得なくなった(災厄の記 15 頁)。つまり各個人が有している質料としての種“人”は、付帯的な諸形相を取りのぞけば「違いがない」という意味で同一 *unum et idem*、もしくはほとんど同じ *consimilis* となる。彼のこの変更後の立場が、通例「“無差別” 実在論 *indifference realism*」と整理されるものである。

本稿において取り上げる“status”⁴⁾を巡っての議論は、このアバエラルドゥスによ

る二つの実在論批判と、実在論者たち、特に“無差別”説をとる論者たちによる実在論の擁護という場面で繰り広げられた議論である。

アバエラルドゥスの status —— 実在論批判と status の導入

アバエラルドゥスは *Glossae super Porphyrium* (以下、*Glossae...*と略記) においても、論理学書の中では最も後期に書かれた *Glossulae super Porphyrium*⁵⁾ (以下、*Glossulae...*と略記) においても、普遍を次のように論じている。まず普遍を言葉の側のみ認める立場と事物にも認める立場とが考えられうるとし、そのいずれであるのかと問題をたてる (*Glossae* 9:12-10:7, *Glossulae* 512:7-515:9)。ここで改めて確認しておくが、彼にとって普遍は定義からして言葉の側にあることは疑いようもなく (*Glossae* 9:18-20)、問題になり得ない。むしろ問題となるのは、言葉^{だけ}でなく事物^{の側}にも普遍を認めるかどうかということである。そして後者の選択肢をとる立場、つまりグィレルムスらが取っていたと思われる立場などを紹介して論駁を加えて「事物を普遍的だと言うことはできない」と結論し (*Glossae* 10:8-16:18, *Glossulae* 515:10-522:9)、彼は言葉の側のみ普遍性を認める。

さて、事物の側に普遍を認めないアバエラルドゥスが論敵たちから当然のように突き付けられたであろう問いがある。つまり彼の立場では個物の中に普遍を認めない、例えば各個人の中に人という種が事物として在るということを認めないので、どういう理由で、ある普遍語 (例えば「人」) が特定の個々のもの (例えば個々人) に充てられるのかという問いである。というのも、このことはグィレルムス流の普遍実在論に立てば簡単に説明できるからである。例えば、個々のすべての人のうちには種・人が内在しており、逆に種・人が内在しているものだけに「人」という語を充てることのできるのだと。しかしアバエラルドゥスはそのような事物は拒絶したのだから、それに代わる何か、つまり様々な人に対して同じように「ヒトだ」「人である」というような述定がなぜ可能なのかということの説明が求められたであろう。事実、*Glossae...*において、この問いに答えようとしている。

上述の通り彼は言葉の側のみ普遍性を認め、続いてその普遍語について説明した後、ポルフィリウスのいわゆる「三つの問い」にいくつか問いを付け加えている (*Glossae* 19:14-20)。そしてその付け加えられた問いのうちの一つが、「普遍語を事物に付与する共通原因は何か」という問題である (*Glossae* 19:21-20:14)。——彼はこ

う答える、諸個人は「人において in homine ではなく、人であることにおいて in esse hominem」(*Glossae* 19:24-25)、すなわち「人の status において、すわなち人であることにおいて in eo quod sunt homines 一致する convenire」(*Glossae* 20:3-4)と答える。つまり、諸個人の間で一致するような人の質料(=人という事物的種)を持っているから名称付与が行われるのではなく、各個人は人の status において一致するから人という名称が付与されるのだと彼は言うわけである。そして彼はさらに「我々は人であること esse hominem 自体を人の status だと呼んでいるのであり、それは事物ではない」(*Glossae* 20:7-8)と付け加えている。つまり status は普遍を諸個物にあてはめる根拠・原因ではあっても事物的な何かでは決してないと説明している⁶⁾。

ここでの彼の説明を、人であること esse hominem でもって人だという判断を根拠づけようとか、あるいは実際われわれが人であることの論拠にしようとか、そういうことであると解するのは不適切であろう。彼がここで行なったのは言語の働きについての説明であって、認識や現実の説明ではない。個々の人は人であることによって一致するので人という語を充てられるのだという一見同語反復にも思える説明は、“卵が先か鶏が先か”式の単純な図式では説明できない言語の特殊性を表現している。それゆえこの箇所がアバエラルドゥス普遍理論の要として取り上げてこられた⁷⁾のはもったもなことだと言えらるだろう。

この節を切り上げる前に、「共通原因」に関して指摘しておかねばならないことがある。先に確認した通り *Glossae*...は、普遍実在論を論駁し普遍を言語の側にのみ認めるところまで *Glossulae*...とほとんど対応する議論がなされている。さらにポルフィリウスの「三つの問い」に彼自身のたてた問いを付け加えているという点では、*Glossulae*...とだけではなく、両註解の間の時期に書かれた *Glossae super librum Porphyrii secundum vocales*⁸⁾とも対応している(*Glossulae* 524:25-31, 530:20-23; *G. sec. voc.* 131:20-132:7)。しかし *Glossae*...と *G. sec. voc.* にはある「共通原因」についての問いが *Glossulae*...にはない。「普遍はどのような知を成すか」という問い(*Glossulae* 530:20-23)に答えて、諸個物の一致について論じ、「人であることから ex eo quod sunt homines」という表現も用いているが、「status」という語は使っていない(*Glossulae* 531:30-532:8)。さらに *G. sec. voc.* における「共通原因」の問い(*G. sec. voc.* 131:20-24, 134:5-8)には、普遍の成す知についての議論で応答としている(*G. sec.*

voc. 134:9-19). つまり, *Glossae...*を書いた後, 彼は(共通原因という特殊な意味としては) *status*に見切りをつけているのである⁹⁾.

実在論者の *status* — *status* 実在論未満

status を普遍理論の重要な説明原理として用いる実在論(本稿ではこれを「*status* 実在論」と呼ぼう)についてわれわれが手にしているテキストというのはそれほど多くない。古くから知られているものでは, モルターニュのガレリウス(*Galterius/Gauterus de Mauritania*, ワルター *Walter of Mortagne*) が普遍に関する *status* 説とも表現すべき実在論をとったことをソールズベリーのヨハネスが『メタロジコン』で報告しているほか, 批判的な立場からは, アバエラルドゥスによるものと(後に取り上げ検討する), いわゆる「*De generibus et speciebus*」とがある¹⁰⁾。逆に当事者によるものとしては写本 Paris, Bibliothèque nationale, lat. 17813, fols 1-19va の第1〜3論考と写本 Paris, Bibliothèque nationale, lat. 3237, fols 125ra-130rb とがある。前者の第2, 第3論考はかつてオレオーが校訂し, 後に *Dijis* が批判版を公にしている¹¹⁾。本稿では, 普遍実在論の *status* 説として特に Paris BN lat 17813 の第2, 第3論考を取り上げよう¹²⁾。

まず「*Sententia de universalibus secundum magistrum R.*」と題されている第3論考¹³⁾であるが, そもそもこれが単純に普遍実在論だと整理してよいのかという問題もあるが, しかし筆者はのちに扱う第2論考と同じくグィレルムスの系譜, つまり普遍実在論の系譜に整理されるべきだと考える¹⁴⁾。そして第3論考において *status* は, 用例はわずかながら, 興味深い使われ方をしている。

第3論考著者(Magister R.)は文法学の用語を用いて議論を行なうが, それは「普遍的物事に関して」(*Sententia...*§1)である。つまり, 「ヒト」という音声 *vox* が総称的 *appellativa* (普通名詞的)に使われる場合, それが名指す *nominare* のは個々の人々, それが表示する *significare* のは人のうちの何らか普遍的本性(つまり人すべてに共通する“寿命のある理性的な動物”という本性)であり, そのような本性が普遍的物事なのであると言う(*Sententia...*§2)。さらに, 例えば「人は種である」というような使われ方をする場合の「人」は総称的ではなく(もしそうであれば, 任意の人あるいはすべての人が種であることになるという)固有的 *propria* ののだと言う(*Sententia...*§3)。そして「人」という語がこの固有的に使われる場合に表示される

人が、「その *status* に即して受け取られる事物」と言い換えられ、それは可能質料だと説明される (*Sententia...* § 4)。それに対して現実質料は、総称的に使われた場合とともに表示される *status* に即して受け取られるのだと説明される (*Sententia...* § 5)。

第 3 論考で *status* の用法は以上の二例だけなのだが、これだけでも特殊用語として使われている印象を与える。つまり慣例的な *status* の用法がすでにあって、それを前提にしているのだというような予想をわれわれに与える。とはいえここでは次の二点のみ指摘しておきたい。一つは、語が総称的に用いられた場合、語は本性とともに *status* を表示するということである。もう一点は、「*status* に即して *secundum... statum*」という表現が用いられているということである（これが慣用的な言い方として第 2 論考において頻出することを次に見よう）。

实在論者の *status* —— 便宜主義的 *status*

第 2 論考¹⁵⁾は「*Tractatus De generali et speciali statu rerum universalium*」と題されており、ガルテリウス（もしくはその弟子）の著作であろうということで概ねの意見が一致している¹⁶⁾。第 2 論考の著者は、実際に存在するのはすべて個物だと明言しつつも、普遍は個物の有する質料であるという意味で、その個物が普遍でもあるとも言う。つまり普遍的事物を認めている。例えば、ソクラテスは個人であり、「人」という最下位の種であり、「動物」という最下位の類でもあり、「実体」という最高類でもあると述べられる (*Tractatus...* § 26)。そしてどの側面でそのものを捉えるのかは注目 *attentio* によるのだと説明する。

事物について区別する側から記述すれば「注目」となるのが、区別される事物の側からならば、「～の *status* に即して」という表現になる。つまりソクラテスをソクラテスとして注目する場合、ソクラテスはソクラテスの *status* に即して他の人と異なる（つまり個人である）ということがわかり、それゆえ「ソクラテス」という語はソクラテスの *status* に即してソクラテスを表示するのである (*Tractatus...* § 27)。さらにソクラテスは人の *status* に即して種であり、多くのもののうちにあり、多くの者にとって質料である (*Tractatus...* § 31) のだが、ソクラテスや他の人々は人の *status* に即しては同一、つまり存在的に *essentialiter* に同じではなく違いがない *indifferens* という仕方と同じだと説明している (*Tractatus...* § 30)。つまり第 2 論考でとられている *status* 实在論は、基本的には“無差別”説にのっとって、「違いがない」と言

うための地盤を与えるために「～の *status* に即して」という限定を導入したものだと言える。

しかしこの「*status*」という用語は、個的な本質や個的な同一性を語る際にも (*Tractatus...* § 27, *etc.*)、個の種的な同一性を語る場合にも (*Tractatus...* § 31, *etc.*)、個の種への帰属や個と種の間を語る際にも、述定や命題について論じる際にも (*Tractatus...* §§ 33-5, *etc.*)用いられているにもかかわらず、多用されているこの用語自体については、奇妙なことに何も説明がない。数ある用法のほとんどすべてが「～の *status* に即して」という表現で用いられ¹⁷⁾、第2論考著者が「*status*」にどのような意味を与えて用いているのか明記されていない¹⁸⁾。第3論考の場合と同じように、慣例的な用法がすでにあったという予想をわれわれに抱かせるが、第3論考とは違って普遍語によって *status* が表示されるとは言わないし、また *status* が普遍だとも考えない。しかし、そもそも *status* がどういう存在身分であるのかはわからない、つまり事物であるとも事物ではないとも、あるいはそれに代わる議論をまったく行っていない。逆に言えば、ほとんど慣用的な言い回しとしてだけ捉えていたので、つまりはっきりとした存在身分を確定しないまま用いていたので、第2論考著者は、あらゆる議論において *status* という用語を連発できたのだろう。

アバエラルドゥスの *status* —— *status* 実在論批判

次に、その *status* 実在論をアバエラルドゥスがどのように論じているか概観しよう。*Glossae...*においては、まず“無差別”説を紹介した(*Glossae* 13:18-14:6)後に、その立場をさらに展開した説の一つとして前節の *status* 実在論と同様の主張をする実在論を紹介している。つまりそこでは「*status*」という用語こそ用いていないが、個物と普遍が同一のものであり、人である限りでの個々の人こそが人という種なのだ、という主張を紹介している(*Glossae* 14:18-31)。それに対して彼は、個と普遍の区別が無意味になってしまうなどの論点からこのような立場の実在論を批判している(*Glossae* 15:23-16:18)。——他方、*Glossulae...*においてもまず“無差別”説を紹介し(*Glossulae* 518:9-16)、その立場の展開として「*status*」という用語を用いて、同様の実在論を紹介し(*Glossulae* 518:9-27)、批判を行なっている(*Glossulae* 518:28-521:20)。

まず両テキストにおいて筆者が特に注目したいのは、第2論考 *Tractatus...*なら「*status*」を用いて表現するようなところをアバエラルドゥスがどのような用語・表

現を用いているかということである。つまり status 実在論ならば「～の *status* に即して」と表現するであろうところを、*Glossae...*では「～であることから・～である限りで *ex eo quod*～*est/sunt*」という表現を用いている。なお、*Glossulae...*では「*status*」を使って「～の *status* から *ex statu*～」という表現になってはいるが、「～から *ex*～」という語法は変わっていない¹⁹⁾。

次に、status 実在論を紹介し批判する両テキストにおいて大きく異なる点として、批判の文脈の分量というものが指摘できる。つまり *Glossae...*に比べ *Glossulae...*では論述が3倍近く増えている。内容的には基本的に両テキストとも、個と普遍の区別に基づく批判を中心とするものであるが、*Glossulae...*においては批判とそれに対する反論、さらにその反論への再批判という仕方での議論の組み立てが複雑になっている。これが意味するのはおそらく、アバエラルドゥスが *Glossulae...*を著述していたころ status 実在論が強力な論陣を引いてアバエラルドゥスに対抗していたということではないだろうか。——先に確認した通り第2論考 *Tractatus...*では、既に定着した *status* の慣用用法があったことを予想させるような *status* の用い方がなされている。また、第2論考では普遍が諸個物において「同じ」という場合に存在的に *essentialiter* ではなく違いがない *indifferens* という仕方でののだと繰り返し述べているが、このことも「存在的に同じ」ということを批判した論敵の存在をわれわれに強く連想させる。ちょうどそれと対応するかのようには、*Glossulae...*でアバエラルドゥスは入念な status 実在論批判を行なっているのである。status 実在論者による第2論考 *Tractatus...*とアバエラルドゥスの *Glossulae...*は（そして *Glossae...*も）まさに両者の論争を現代に伝える物として読まれるべきである。

そしてさらに、アバエラルドゥスの論述を論争という文脈に置いてみると、第2論考 *Tractatus...*著者とアバエラルドゥスの間にある重要な論点に関する微妙な違いに気づくことになる。——本稿において「status 実在論」と呼んでいる立場を King は「一致実在論 Agreement Realism」と呼んでいる²⁰⁾。アバエラルドゥスが彼ら実在論者の立場を、*Glossae...*においても *Glossulae...*においても一貫して「一致する *convenire*」という語を用いて説明しているからである²¹⁾。そして微妙な違いというのはここにある。第2論考 *Tractatus...*においても「一致する *convenire*」という用語は使われてないわけではないし、第2論考の立場を「複数のものが一致する限りで個が普遍である」とまとめるのも見当外れでは決してない²²⁾が、しかしそのようなこ

とを表現するために、その論考において繰り返し用いられている用語はむしろ「同一 unum et idem」「ほとんど同じ consimilis」である。ところが、アバエラルドゥスによる報告では、一致こそがまさにその立場を特徴づける用語であるかのようなまとめ方になっているのである。

アバエラルドゥスの status —— 諸個物の一致と status

以上のようなアバエラルドゥスによる status の用法から、筆者は次の点を指摘したい。アバエラルドゥスが普遍理論における専門用語として status を用いる場合は、かつて普遍語付与の原因・根拠として提出した時も、そしてそのような場面では使わなくなってからも、あるいは論敵たちが普遍論争においてその語を用いる時に彼がその語を理解する際にも、まさに「一致」の原理として status を理解している、と。

だがそれに対しては、status が「そこにおいて諸個物の一致するところの何か」であるということはすでに確認済みで改めて強調するまでもないことではないか、という反論が提出されるかもしれない。しかしそうではないと言いたい。そこにおいて諸個物が一致するところの何かというのは、諸個物においてあるものではない。すなわち諸個物が status を有していて、それにおいて一致するのではない。つまり人であること（人の status）が各個人に内在しているのではなく、各個人は人であるということから、人である限りで一致しているのである。その場合、status がどのような存在身分にあるかということを取って表現しようとすれば、個物のうちにあるのではなく、われわれ認識する側が勝手に押しつけるようなものでもなく、諸個物間と認識との間に成立しているような何ごとかである、と言うほかはないだろう。

そしてこのような論点はまさに status 実在論者たちが見落としした（あるいは、わざと無視した）論点であり、アバエラルドゥス諸研究においてもあまり強調されていない論点でもある²³⁾。status 実在論者たちは、例えばソクラテスが、ソクラテスの status、人の status、動物の status、実体の status など多種多様な status を持っているかのように考えた。その場合、status はどの側面で類的・種的な質料に注目するか確定するための単なる「状態」という意味になってしまう。——しかしアバエラルドゥスは、ソクラテスとプラトンが同じく人であると言われるのは両個人が人の status において一致するからだと言ったのであって、両人おのおののうちに両人が一致するような人の status があるとは言っていない。

だが実際、アバエラルドゥスによる status の用語法にはあいまいさがあることも否定できない。だからこそ実在論者にそのあいまいさを逆手に取られたのであろうし、後に彼自身もその用語を使わないという選択をしたのかもしれない。だがそれでも考え方自体は捨てていない。つまりそういう用語を使うかどうかはともかく、一致の原理としての“status”もしくは“～であること eo quod ~ est/sunt, esse + acc.”は、彼の普遍理論を根底から支えている考え方、彼の存在理解の要となっている用語なのである。*

注

- 1) アバエラルドゥス「災厄の記」：島中尚志訳『アベラールとエロイーズ——愛と修道の手紙』岩波文庫、1939年、1964年改訳。
- 2) “essentia”に対して「存在者」という訳語をあてるのが適当であるとは思わないが、彼らの文脈において「本質」と訳語をあてるのはあまりにも多くの誤解を招くことになる。また、普遍実在論の系譜の中での“essentia”については下記の論文を参照。Iwakuma Yukio, ‘The Realism of Anselm and his Contemporaries’, in D. E. Luscombe & G. R. Evans (ed.), *Anselm Aosta, Bec and Canterbury*, Sheffield AP 1996, pp. 120-135.
- 3) 本稿において「実在論」という用語を用いる場合はあくまで“普遍に関するの realism, res 主義”のことである。つまり普遍とは res 的な何かであるとする立場、あるいは res としての普遍を認める立場である。
- 4) 本稿において「status」は敢えて日本語に訳さず、そのままラテン語で言及したいと思う。敢えて訳すとすれば「状態」（ヨゼフ・ライネルス「初期スコラ哲学におけるアリストテレスの実念論」4章、『中世初期の普遍論争』稲垣良典訳、創文社、1983年11月、20-26頁）や「事態」（ペトルス・アベラルドゥス『ポルフェリウス註解（イングレディエンティウス）』清水哲郎・訳、『中世思想原典集成7前期スコラ学』、平凡社、1996年、440-500頁）などが候補として考えられるが、「状態」は実在論者の「status」には有効な訳語であってもアバエラルドゥスの「status」には不適切であるし、また「事態」という訳語はむしろ「dictum」の訳語としての方が適切だからである。
- 5) *Glossae super Porphyrium*: Petrus Abaelardus, *Logica ‘Ingredientibus’* 1, hrsg. Bernhard Geyer, (*Beiträge zur Geschichte...* Bd. 21 Heft 1), 1919, 前掲『ポルフェリウス註解（イングレディエンティウス）』。 *Glossulae super porphyrium*: Petrus Abaelardus, *Logica ‘Nostrorum petitioni sociorum’*, hrsg. Geyer, (*Beiträge zur Geschichte...* Bd. 21 Heft 4), 1933 rep. 1973. — また、*Glossae...*は1117~21年の比較的早い時期に、*Glossulae...*は1120~24年の比較的遅い時期に書かれたと推定されている。Constant

Mews, 'On Dating the Works of Peter Abelard,' in *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Âge*, 52 (1985), pp. 73-134.

- 6) 「事物ではない」という点では, dictum も命題の真偽を決定できるような何かでありながら, 決して事物ではないと明言されており, 諸研究において status は dictum と並べて論じられるが, 本稿において dictum についてまで論じることができない。筆者がどのように dictum を解釈するかは下記の拙稿を参照いただきたい。永嶋哲也「命題的「真偽」と項辭的「虚実」——アベラルドゥスの“dictum”再考」, 『哲学』51号, 日本哲学会, 2000年4月, 180-189頁。
- また dictum や status についての議論は, われわれにストア派の *lecton* を連想させるが, テキスト的な直接の影響関係は確認されていない。Kretzmann はむしろ, 直接の源泉はアリストテレスの『カテゴリー論』だろうと論じている。N. Kretzmann, 'Medieval logicians on the meaning of the *propositio*,' *Journal of Philosophy* 67 (1970), pp. 767-787, at pp. 773-774, note 9.
- 7) Cf. Martin M. Tweedale, *Abailard on Universals*, Amsterdam/New York/Oxford 1976, chap. 5 'Abailard's Theory of *Dicta* and *Status*'; Peter O. King, *Peter Abailard and the Problem of Universals*, Princeton 1982, vol.1, chap. 16 'Status, Cause, and Event'; 清水哲郎「言語と概念の存在空間を拓くこと——アベラルールにおける普遍の表示作用について」, 『北海道大学文学紀要』35の2, 1987年, 1-42頁; John Marenbon, *The philosophy of PETER ABELARD*, Cambridge University Press 1997, chap. 8 'Universals'.
- 8) *Glossae super librum Porphyrii secundum vocales: Carmelo Ottaviano*, 'Un opuscolo inedito di Abelardo,' *Fontes Ambrosiani* III, Florence 1933, pp. 95-207. テキスト参照箇所の指定には Ottaviano によるテキストの頁・行数を用いるが, 本稿自体は岩熊氏の読み(現時点では未発表)に基づく。またこの著作に関しては下記も参照。C. Mews, 'Neglected Gloss on the «Isagoge» by Peter Abelard,' *Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie* 31, 1984, pp. 35-55.
- 9) Marenbon はそれゆえに status に(そして dictum にも)否定的な評価をしている。*The philosophy of... ABELARD*, pp. 190-195.
- 10) Joannes Saresberiensis, *Metalogicon*, Lib.II cap.17, ed. J. B. Hall, *Corpus Christianorum continuatio medievalis* XCVIII, Turnhout 1991. ソールズベリーのヨハネス『メタロジコン』甚野尚志ほか訳, 『中世思想原典集成 8 シャルトル学派』平凡社, 2002年9月。De generibus et speciebus, in (ed.) V. Cousin, *Ouvrages Inédits D'Abélard*, Paris 1836, pp. 507-550; KING, *Peter Abailard...*, II, pp. 143*-185*, tr. pp. 186*-212*.
- 11) B. Hauréau, *Notices et extraits de quelques manuscrits latins de la Bibliothèque Nationale* V, Paris 1892, pp. 290-338, esp. pp. 298-320; Judith Dijs, 'Two Anonymous

12th-Century Tracts on Universals', in *Vivarium* XXVII, 2, nov. 1990, pp. 85-117.

- 12) 岩熊幸男氏のご厚意により, Paris BN lat 17813 第1論考と Paris BN lat 3237 の校訂テキスト(未刊行)も参照させていただいた。——前者は, グィレルムス(あるいは彼に近い弟子)によるものと推定されるポルフェリウス註解で, 基本的に“無差別”実在論をとっているが, そこでの status の用法はまだ特殊用語としての用法ではない。それに対して後者は, Paris BN lat 17813 第2論考と同様まとまった status 実在論を展開しているが, 与えられた紙面の関係上, 具体的に検討するのは別稿に譲らざるをえない。
- 13) Paris BN, lat. 17813, 19ra-19va; Dijs, 'Two Anonym...', pp. 113-117.
- 14) 諸研究の議論を概観した上で筆者の論拠を示すべきであるが, この点に関しても別稿に譲らざるをえない。さしあたり下記の論文を参照。Constant Mews, 'St Anselm and Roscelin: Some new texts and their implications' II, in *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Âge* 65, 1998, pp. 39-90; Iwakuma Yukio, 'Peter Abelard's Influence on 12th Century Logic', in *The Cambridge Companion to Abelard* (forthcoming).
- 15) Paris BN, lat. 17813, 16va-19ra; Dijs, 'Two Anonym...', pp. 93-113.
- 16) Hauréau はガルテリウスによるものとしているが(Hauréau, *Notices et...*, p. 324. Cf. Dijs, 'Two Anonym...', pp. 87-88), それに対して Reiners はガルテリウスとは別の誰かによるものだとしている(ライネルス『中世初期の普遍論争』26-30頁)。ところが, King は第2論考を翻訳する際, 疑うことなくガルテリウスのものだとしており(King, *Peter Abailard...*, II, pp. 128*-142*, esp. p. 128* note. Cf. Dijs, 'Two Anonym...', p. 88), テキスト校訂者の Dijs も(敢えて断言は避けているが)ガルテリウスによるものかもしれないとしている(Dijs, 'Two Anonym...', pp. 90-91).
- 17) 「～の status において in statu～」という表現(*Tractatus...* § 18, 38, 47)や, 「～の status を持つ～statum habet」 「～の status が……である/ないようにならせる～status confert/aufert……」という表現(*Tractatus...* § 38)も頻度はわずかながら使われている。
- 18) *Tractatus...* § 43 の記述から, 少なくとも「～の status に即して」という表現が「～であるという点において/～である限りで in hoc quod sunt～」という意味の限定 determinatio だということだけは判断できる。
- 19) 前節で注記した通り第2論考では「～の status に即して」という表現が「～であるという点において/～である限りで in hoc quod sunt～」で置き換えられており, アバエラルドゥスによる紹介との一致と微妙なズレが確認できる。Cf. *Tractatus...* § 43.
- 20) King, *Peter Abailard...*, I, pp. 215-234. なお, Tweedaie は個と普遍が同じものであるという主張から“identity theory”と呼んでいる(Tweedale, *Abailard on Universals*, pp. 116-127)が, “同一存在”説が諸個物における普遍を“idem et unum”と主張する立

場であるだけに、誤解を招きやすい命名だと思う。

- 21) Cf. *Glossae* 14:18-31; *Glossulae* 518:9-16. また *Glossae...*において status 実在論の論駁をはじめる箇所なども該当する部分として指摘できよう。 *Glossae* 15:23-31.
- 22) *Tractatus...* § 43 の用法などを見る限り、アバエラルドゥスによる status 実在論の報告は正確である。しかし「一致する」という表現は § 43 以外には § 10, 27, 30, 47 だけで使用頻度としては低い。
- 23) 特に Marenbon の解釈にこの傾向が著しいと思う。彼は status を「然々の類種に属する何かであるという状態 condition」 (*The philosophy of... ABELARD*, p. 192) と説明し、status が普遍語の表示対象になると、さらに status とは概念 (特に神精神のなかの概念) であると論じ進める (*op. cit.*, pp. 192-194)。実際、彼の status 解釈が、status 実在論者の言う status と多くの共通点を有しているのは偶然ではないだろう。
- * 大会の席上や大会後、貴重な質疑を提起して下さった諸先生方に感謝したい。発表前の草稿段階で情報や助言をくださった岩熊幸男氏と、プレ発表の場を下さり有益なコメントをくださった稲垣良典先生をはじめとするトマス研究会の皆様方に、この場を借りてお礼申し上げたい。
- また本稿に先立つ口頭発表の原稿や、本稿で言及している拙論などは、筆者のウェブページ <<http://www002.upp.so-net.ne.jp/tetsu/study/study.html>> にて公開している。あわせて参照いただければ幸いである。